

第2回「てつがくカフェ Plus」を開催します！

「死と向き合うこと」

「わたしは死のために止まれなかったので／死が優しく私のために止まってくれた」というエミリー・ディキンソン(1830-1886、アメリカ)の以下の詩は、私たちの「死」についての考え方に驚きを与えるメッセージを持っているのではないかと思います。多くの方はたいてい、「死」に対しては「怖いもの」「悲しみをもたらすもの」などのマイナスのイメージを抱いていたり、あるいは人生の終結や生の対極にあるものと考えたりしているでしょう。しかし、この詩は果たしてそのように「死」を捉えているのでしょうか。

今、この詩を提示しようとする理由はほかでもなく2011年3月11日以降、自分に、愛する人に、いつともわからず必ず訪れる「死」と向き合うことを、多くの人が突きつけられたと感じるからです。私たちは、夥しい数の「死」に触れざるを得ない状況—直接的にも間接的にも—に置かれることになったのです。「死」とは何か、またそれに伴う悲しみや恐怖、謎について、少し立ち止まって考えてみる時間は必要ではないかと考えます。

もちろん、簡単に口を開けることではないと思います。人間が何千年に渡って考え続けた「死」ですから、容易く「答え」が見つかるものでもありませんし、求めるものでもないかもしれません。口に出れないときは、沈黙もまた無言という名の言葉。ディキンソンの詩を出発点として語り合うことによって、各人の心に「死」に対する何かしらの「気づき」が芽生える瞬間を探してみませんか。(文責：房内まどか)

わたしは「死」のために止まれなかったので—
「死」がやさしくわたしのために止まってくれた—
馬車に乗っているのはただわたしたち—
それと「不滅の生」だけだった。

わたしたちはゆっくり進んだ—彼は急ぐことを知らないし
わたしはもう放棄していた
この世の仕事も余暇もまた、
彼の親切にこたえるために—

わたしたちは学校を過ぎた、子供たちが
休み時間で遊んでいた—輪になって—
目を見張っている殺物の鳥を過ぎた—
沈んでゆく太陽を過ぎた—

いやむしろ—太陽がわたしたちを過ぎた—
露が降りて震えと冷えを引き寄せた—
わたしのガウンは、蜘蛛の糸織り—
わたしのショールは—薄絹にすぎぬので—

わたしたちは止まった
地面が盛り上がったような家の前に—
屋根はほとんど見えない—
蛇腹は—土の中—

それから—何世紀もたつ—でもしかし
あの日よりも短く感じる
馬は「永遠」に向かっているのだと
最初にわたしが思ったあの日よりも—

■ 第2回「てつがくカフェ Plus」 ■

テーマ：「死と向き合うこと」

日時：2012年11月26日(月曜日)19:00~21:00

場所：仙台市市民活動サポートセンター3階 研修室2

ファシリテーター：房内まどか(てつがくカフェ@せんだい)

参加費：無料

事前申込み：不要(直接会場にお越しください)

問い合わせ先：E-mail tanishi@hss.tbgu.ac.jp (西村まで)

てつがくカフェ@せんだいHP：

<http://tetsugaku.masa-mune.jp/>

■ 「てつがくカフェ Plus」とは ■

通常のとつがくカフェを行いながら、対話の進め方やテーマの絞り方、さらにはファシリテーション・グラフィックの書き方などを参加者どうしで同時進行的に問い直す、メタ・ダイアログをプラス (plus) したトレーニング型の「てつがくカフェ」です。

■ お知らせ ■

てつがくカフェ／

「志賀理江子展『螺旋海岸』からもっと考える」

日時：12月23日[日]15:00~17:00 場所：せんだいメディアテーク1階

オープンスクエア 参加無料(事前申し込み不要、直接会場へ)

詳細は、<http://www.smt.jp/rasenkaigan/> をご覧ください。

註) 第5連「地面が盛り上がったような家」は「墓」を指す。

亀井俊介編『対訳 ディキンソン詩集—アメリカ詩人選(3)』(岩波書店、2001年)

わたしは「死」のために生まれなかったので—
「死」がやさしくわたしのために止まってくれた—
馬車に乗っているのはただわたしたち—
それと「不滅の生」だけだった。

わたしたちはゆっくり進んだ—彼は急ぐことを知らないし
わたしはもう放棄していた
この世の仕事も余暇もまた、
彼の親切にこたえるために—

わたしたちは学校を過ぎた、子供たちが
休み時間で遊んでいた—輪になって—
目を見張っている穀物の畝を過ぎた—
沈んでゆく太陽を過ぎた—

いやむしろ—太陽がわたしたちを過ぎた—
露が降りて震えと冷えを引き寄せた—
わたしのガウンは、蜘蛛の糸織り—
わたしのショールは—薄絹にすぎぬので—

わたしたちは止まった
地面が盛り上がったような家の前に—
屋根はほとんど見えない—
蛇腹は—土の中—

それから—何世紀もたつ—でもしかし
あの日よりも短く感じる
馬は「永遠」に向かっているのだと
最初にわたしが思ったあの日よりも—

Because I could not stop for Death —
He kindly stopped for me —
The Carriage held but just Ourselves —
And Immortality.

We slowly drove — He knew no haste
And I had put away
My labor and my leisure too,
For His Civility —

We passed the School, where Children strove
At Recess — in the Ring —
We passed the Fields of Gazing Grain —
We passed the Setting Sun —

Or rather — He passed Us —
The Dews drew quivering and chill —
For only Gossamer, my Gown —
My Tippet — only Tulle —

We paused before a House that seemed
A Swelling of the Ground —
The Roof was scarcely visible —
The Cornice — in the Ground —

Since then — 'tis Centuries — and yet
Feels shorter than the Day
I first surmised the Horses' Heads
Were toward Eternity —

註) 第5連「地面が盛り上がったような家」は「墓」を指す。

総井俊介編『対訳 ディキンソン詩集—アメリカ詩人選(3)』(岩波書店、2001年)